

保育の質の探求①「一本のきゅうりから」

— 2歳児の保育を通して考える保育の総合性 —

今 泉 良 一

日本児童教育専門学校

The study of childcare quality ① Acucumber theory

— How to enhance childcare through two-year-old nursing experience —

Imaizumi Ryoichi

Japan Juvenile Education College

要旨：本稿の目的は、保育実践における保育者と2歳児とのかかわりをもとに、遊びや生活を通して、どのような学びが展開されているのかを考察し、「保育の総合性」について探求することである。『幼稚園教育要領』（2017）には「ねらいが総合的に達成されるようにすること」と明記され、『保育所保育指針』（2017）においても、「生活や遊びを通して総合的に保育すること」と示されている。領域別、活動別という捉え方ではなく、生活のあらゆる面に向けていくこと、そのようなところに「保育の総合性」に通ずるポイントが挙げられると感じる。

キーワード：保育の質、保育の総合性、異年齢のかかわり、食育

1. はじめに

本稿は、筆者が保育士として勤務していた時（2014年）の実践記録の一部である。

保育所保育指針（2008および2017）には「乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること。」と明記されている。保育を展開していくための5領域、すなわち「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5つの領域は相互に関連し、総合的な指導がなされなくてはならない。保育実践の過程を通し、保育の総合性について考えてみたい。

2. 二歳児担任となって

自立と依存の間を行き来する2歳児、自己主張が顕著になる発達段階である。

はじめて2歳児クラスを受け持ったのは保育士5

年目のことである。当時の私は、保育に関する知識も浅く、集団としてまとめることばかりに固執してしまい、無意味な拘束や抑制で子どもたちを押さえつけていたのではないかとという反省を抱いていた。保育士として10年目に2度目の2歳児クラス担任となり、気持ちも新たに保育がスタートした。

当時の2歳児クラスは、身体を動かすことが大好きで、言葉もたくさん出ているが、どういうわけか食への関心が低い子が多かった。給食の白飯、パン、肉、魚、野菜はもちろん、おやつジュースやケーキなどにもあまり興味を示さず、意欲的に食事をしたり、完食する子が見られていなかった。

その中でもA君は特に偏食がひどく、苦手なものや食べ慣れないものが献立にあると、一口も口にしない日もあった。家庭でも「オムライスしか食べない」と、保護者も偏食に悩んでいるようであった。

3. A君はなぜ食べないのか？

私は様々な手立てを試みながら、A君の様子を見ていった。まず、食材の形を変え、刻んだり、小分けにしたりしたが、まったく功を奏しなかった。次に、給食の時間を遅らせてみた。空腹感が感じられるよう他児よりも長く遊び、給食へ促した。しかし、食欲よりも眠気の方が増してしまい、結局ぐずって眠ってしまった。また、「スイッチ、オン！」と額を押しておまじないをかけたり、「仮面ライダーみたいに強くなる！」と励まして食べさせたりもしたが、A君の反応はあまりなく、効果はなかった。

そんな時、園長先生から「物的な環境の変化だけが手立てじゃないよ？」「保育者自身も大事な環境の一つ。A君の意欲が引き出されるように、あそび心を持たないと！」と助言を頂いた。

4. A君との関わりを振り返って

A君と真正面から向き合っていたか？A君の気持ちを心から汲み取っていたか？集団としての円滑さばかり重視し、A君のありのままの姿を受け止めていなかったのでは？と振り返った。ジャングルジムに上って「りょういちせんせー！オレすごい？」と聞いてくるA君。ブロックで遊びながら「りょういちせんせー！オレのつくったの見てー！」とやってくるA君。A君から発せられる自己表現に、丁寧に応じていなかったのではないかと大いに反省した。

そこで、A君の好きな粘土を用意し、一対一での関わりを心がけていった。すると、「これ、パン！」と丸めた粘土を手渡してくれた。「A君が作ってくれたパン、美味しいねー！先生と一緒に食べよう？」とままごと遊びに発展した。「オレ、りょういちせんせいとあそぶのたのしい！」そんなA君の一言から、「大好きな保育者と一緒に食事すると楽しい！」そう思えるようにしていくことが、改善の第一歩では？と感じた。保育者や友だちと十分関わっていったことで、A君自身の満足感が得られ、少しずつ給食を口にできるようになったが、野菜だけは頑なに口を閉じ、食べようとしなかった。

5. 一本のきゅうり

五月に入り、園では3、4、5歳児クラスを中心に野菜の栽培が始まった。きゅうりやなす、とうも

ろこしなど、各クラスの前にはプランターが並べられ、2歳児の子どもたちも興味を持ち始めた。その中で、D組（5歳児クラス）のきゅうりの苗が生長し、大きな花が咲くと「おはな、さいたねー」と喜んで観察していた。年長児が水やりをしているとA君も真似して、牛乳パックを片手に水やりをしていた。花が散り、きゅうりの実がなると、日ごとに大きさを増していくのを楽しみに見ていた。やがて、大きなきゅうりが何本も実った。A君もまるで自分たちのクラスのここのように喜んでいった。

ある日、5歳児T君の発案で「H組（2歳児クラス）さんにも、きゅうりあげる！」と、D組から一本のきゅうりが手渡された。T君は私が3歳児担任の頃に受け持っていた子で、捕まえた虫や廃品で作った製作物を見せに、2歳児クラスにもよく遊びに来てくれていた。子どもたちにとっては最も身近なお兄さんであり、親しまれている存在だった。D組からももらったきゅうりに、みんな興味津々で、「明日、食べようね！」と約束した。

次の日、朝から「きゅうり、きゅうり！」と楽しみにしているクラスの子たちの姿が見られた。「きれいないろだねー」「さわるとポツポツしてるねー」「なんか、においするねー」と、きゅうりをみんなで観察しながら、目の前で調理していった。きゅうりを薄切りにして、醤油とごま油で味付けをすると、「いいにおいがしてきた！」とA君も気持ちが高まっているようだった。そして、「オレもたべるー！」と一口食べた。そして、もう一口。

「おかわりー！」

なんということだろう。あのA君が、きゅうりを口にし、おかわりまでするなんて。私は、うれしさと感動で涙の出る想いだった。また、その日の給食に出た小松菜、玉ねぎ、にんじんも食べ、はじめて完食した。園長や主任、同僚にも報告すると、他の先生からも声をかけてもらえてA君もうれしそうであった。「ママにもいうー」とA君が母親にも伝えると、保護者も喜んでいった。

これまで、様々な手立てを試みていたが、A君の心に響いたのは、年長児からの刺激と、きゅうりの栽培見学・調理という実体験であった。

6. 一つのことを全てのことに

次の日から、A君は「これはなにー？」と食材に興味を示し、完食する日が続いた。またカレーの日¹⁾には、その様子を見学したことでも、野菜への興味は深まっていった。7月には地域の畑にじゃがいも掘りへ出かけた。また、掘ったじゃがいもをみんなで洗い、かまどで火を通して食べた。「これ、オレがほったじゃがいもー？」とA君は三つも食べた。T君をはじめ、5歳児クラスとの交流も増え、泥団子を作ってくれたり、折り紙を折ってくれたり、ブロックの遊び方を教えてくれたり、様々な関わりが見られた。一本のきゅうりがきっかけで、いろいろなことに関心が高まった。

7. 保育の総合性とは

これまで述べてきた事例の中には、子どもたちが学び得る要素がたくさん詰まっており、総合的な学びにつながっている。食への興味、自然への好奇心、感謝やありがたみ、異年齢の交流、家庭との連携、地域とのつながり、実体験の大切さ、自己表現→生活の充実→満足→意欲…。

子どもにとってどのような経験が必要なのか？保育者がどのように意識し、どのように感じ、どのように知らせていくか？一本のきゅうりにまつわるエピソードから、私は多くのことに気づかされ、考えさせられた。

また、3歳未満児においては子どもの姿に応じた個別指導計画の立案が求められるが、総合性のある保育を実践するためには、指導計画は不可欠である。子どもがねらいを達成していくために、どの時期にどのような経験が必要かなどを見通して立案

し、生活や遊びの中で子どもの姿がどのように表れるか、その姿が子どもの心身の発達とどのように結びついているか、また園生活の中で身に付けられた力が、将来その子どもにとってどのような意味を持つか、という視点が大切になってくる。

子どものつぶやき、表情などにも保育のポイントが隠されていると感じた。子どもの自己表現は、受け手としての保育者の存在が大きく、保育者の受け止め・関わりによって変化する。保育者の適切な関わりによって、自分の気持ちのイメージが明確なものになったり、無意識や偶然と思われる行動が保育者の認め、反応によって意味付けられ、自分の行動に自覚的になり、潜在的な興味が意識化されたり、表現が意図的になったりすると思われる。子どもたちは期待と意欲を持って、様々なことを学び獲得しようとする。それに応える形で、子どもたちのどんな小さな表現も見逃さず、認めて、応答的に関わる事が大切である。活動のみに重点を置くのではなく、生活そのものが重要であり、あらゆる場面を多面的に捉える意識が求められる。領域別、活動別という捉え方ではなく、生活のあらゆる面に目を向けていくこと、そのようなところに「保育の総合性」に通ずるポイントが挙げられると感じる。

子どもたちの実り豊かな成長につながるよう、今後も「保育の総合性」について考察を深めていきたい。

〈注〉

1) 毎月野外のかまどでカレーを調理している。材料の野菜切りは年長児の特権でもあり、他学年の憧れとなっている。

受付日：2017年8月14日

